

## 八月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

わが唄ひ出す

森 重 香代子 山口

赤きりボン尾つばに結びし馬もゐてけふ賑はへり雨となる馬場  
雨だれがだんだんはづみ打太鼓のやうに鳴る昼ひとり籠もれり  
日に一度声は出すべし昼すぎてわが唄ひ出すピチピチランラン  
衰へは人並かともいくばくの安らひありて鏡を伏せぬ  
早ばやと湯浴みし床に着きたしとひた思ふまで老いたりわれは

息づかひ

小 嶋 一 郎 佐 賀

左肺より一〇〇ccの水を抜くこの細針にいのち預けて  
心拍の乱れはあれど二〇〇歩の廊の往き来がノルマとぞけふ  
カーテンを隔つるのみの息づかひ互みに聞きて午前長のし  
三度目の部屋替はりして窓際のベッドに移る言はるるがまま  
きのふけふ三度三度を完食し八十七のこの身褒めらる

あした

橘 芳 園 新潟

死後の世をたのまぬわれもいまには死にて会ふ人思ひつるむ  
あしたなき命とならばいかほどの銭をはらひてあしたを買はむ  
死にしわれひと日ゆるされ娑婆世界生きるとならばさてなにをす  
ニンゲンは煩惱深し死はヒトの終はりならぬとふ観念生みき  
うらおもてわれにもあれどできるだけおもてを見せて生きてをります

人工知能

松 尾 祥 子 東京

オーダーをすればピコピコ点滅しロボットが来る厚揚げ乗せて  
人間の身体は燃えて無くなるを土に還らぬ物創りだす  
悪と欲ヒトに学びて暴走せんヒトが創りし人工知能  
広島に（核のボタン）を携へてバイデン来たり謝罪もせず  
藤の花さはさは揺れて空澄みてこの世に戦（いくさ）あらざるごとし

☆

☆

イチパー  
1%の豪富が富を収奪し99%のわれら貧困

弱者をば見捨てて走るグローバル・キャピタリズムを何とかせねばマルクスが説きし如くに労働者、資本にとことん追い詰められる年金で暮らせる老いも年々に暮らし貧しくなつて来てます自分らが働いたころ暮会所やゴルフに通うユトリがあつた

水島 晴子 兵庫

日 影 康子 富山

食堂の真昼明るしけふもまたいつもの人に見つめられをり「うちに帰る 小さい子らが待つてゐる」ひと老いて言の葉かなし旧かなの歌すらすらと読みくだす九十五さい国文科卒

ぞつくりと新芽噴きたる唐ひのき細枝に纏せて蟬殻ずがる湧きあがりはた波だてるはなびらの幾重かさねつ白き芍薬

武田 弘之 神奈川

宮柵二記念館館長来ます日やわが家の庭にアマリリス咲く魚沼を短歌を語り尽くるなし宮柵二記念館館長さんと

三十年はや過ぎたるか宮柵二記念館成りし歓喜の日より

G7最終日に馳せ参じたりウクライナ大統領ゼレンスキーは  
G7最終日に馳せ参じたりウクライナ大統領ゼレンスキーは  
G7最終日に馳せ参じたりウクライナ大統領ゼレンスキーは  
G7最終日に馳せ参じたりウクライナ大統領ゼレンスキーは

高野 公彦 千葉

文明も兎も食みしクレソンの茎葉くきは旨しもみどりの莖葉

わがいのち終はるその日を死と言はずへ生を全うする日と言はむトイレにて来し方行方思ひをりここを閑所と呼びたる定家

山鳩の歌を詠みたくなる時は宮先生の恋しきゆふべ

夜深くトイレに行きし老い我の帰りを待ちて我は眠りき

影山 一男 千葉

新聞をかかへ居眠りする老いのごとき一日よ春嵐すぎて

残業代、休日出勤手当なく働きし日よ昭和はるけし

「春の日の空には」とわが歌ひたるをさなをみなも秋には四十七二年男たち集りてビール飲みぬむ銀座ライオン

同窓会行かぬ理由を体調と書けど本音は友あらず孤独

桑原 正紀 東京

もう、まだのあはひのよはひたのためなく七十五度目の夏の来向かふ  
オリンピックとワールドカップのある年を半里塚として辿りてゆかむ  
わがままに生きて来たとは思はねど(献身)の銘あらためて彫る  
風おちて澄める夜空にたち上る獅子よおまへも少し老いたか  
葉ざくらをかよふ五月のかぜのむた記憶のひとつつたつめくれる

狩野 一男 東京

島田 暉 神奈川

返納をしたが古いゆくわがために再取得せむ運転免許  
桐の木に桐の花咲きあなただのし毎朝、駅のホームから見る  
今年五月 我七十二、日本国憲法施行七十六年

愛しきやし五月三日の夜おもふ鈴木京香と長谷川博己  
救急車しづかに過ぎて道の辺は矢車草が咲くまへの雨

宮里 信輝 神奈川

わが家からクルマで10分コンクリートの「宮ヶ瀬ダム」よ入場無料  
東京のビル群かすか宮ヶ瀬ダム展望塔より望む彼方に

雨降る日以外は通ひゆく心「宮里ダム」なり「宮ヶ瀬ダム」よ  
エレベーターでコンクリート内部を直下して見上げればわかるダムの偉容が  
水達が白煙あげて落ちくるを下よりながめる「観光放水」

小島 ゆかり 東京

満員の電車より見る朝の富士その夏山へ眼のみ旅立つ  
バックするわたしを猫はあやしめど明日は娘の恋人が来る  
なんとといふ夢みる顔をするものかこの青年と語る娘は  
吹きおこる風からだのあるごとく青葉もみ合ふ六月の夜  
行きに見し遊ぶ子をらず公園にその子のやうな鳩が遊べり

木畑 紀子 京都

ももさくららふちつつじへと花うつり遠のたけやぶ黄にやつれをり  
黄に染まる敷のなかなる青竹の孫とは老いを測るものさし  
野辺あゆむ五千歩ほどにつたなかる七十余年の自分史辿る  
蝌蚪は蛙、土筆は杉菜、少女はも婆になりたりあな須臾のこと  
夢の世に見てゐし夢にみのりたるまごのごとく赤し茱萸の実

図書館の天窓のぞけばきらきらと星の言葉をたどりてゐたり  
長びける会議に疲れし夕暮れはゴビの砂漠をたどる付け人  
強風にこらへて立てる吾のやうどの水仙も鬱の花冠を  
春風がわが泣き声に聞こえたり湯船に深くもぐりてしまふ  
手のひらの感情線をたどりつつ君のにはひの言葉に吸はる

大松 達知\* 東京

白湯飲んでほぐし始めるあさあさの白湯にするため電気を使う  
忘れ物ありませんか?と問われおり背中まるめて黙って降りる  
知らないの?母が言うときあわれむようなそしてうれしそう表情をする  
この人は村上春樹に会った人そのこの人とおでんを分ける  
ときおりに情夫大松と出るのよね情報と書いたつもりであつて

田宮 朋子 新潟

朝より部屋をきよめて菜をつみて夕餉ひとりのまれびと迎ふ  
裏庭の臺菜摘みつつおもひをりデカン高原の菜の花畑  
駿河竹千筋細工の花入れに山苺葉をいちりん活ける  
筍のおこは、胡麻和へ、若竹煮、天婦羅つくる五月の厨  
くらやみに七年ねむるブランデー漬の梅酒の琥珀のひかり

津金 規雄 神奈川

今はただ時を湛へて展示さる口大いなる越前の甕  
「美しく青きドナウ」も「モルダウ」も流れてやまぬ歳月のそれ  
春の雨を聴きつつ浸かる昼の湯のぬくきに溶けてゆく僻ひがころ  
にんげんは塵が凝りしと聞くなれば塵に還らん吹く風のなか  
静謐とは永遠と同義と啓示する長谷川潔のマニエル・ノワール

小山 富紀子 京都

鼻歌のつぎつぎと出るこの朝わが身に問ひぬ 何かあつたん  
積年の謎のふと解けあなうれしまだまだ味なこの世ではある  
店名の由来はたうとう告げぬまま「甘菜花子」は暖簾下しぬ  
たらずめば父のむかしを語るごと藤棚のふぢ夕べをさやく  
大谷君明るき話題をありがたう戦争の暗きニュースのあとに

清水 正子 神奈川

ふさぐ日も谷戸は息づきくろぐると土竜のあげし春の土あり  
谷戸棲みのこの春もよき出会ひあり花散らしの風、花流しの雨  
桜狩りなどと洒落れてもわが谷戸のそこらこらを彷徨くばかり  
塩漬けの花を添へたる桜餅このごろあらず些事なれど惜し  
気晴らしに今日はハマ線でペペにゆく姥の身飾る春の服見む

後藤 美子 北海道

今年すでに三分の一過ぎたりと五月一日晴るる空あふぐ  
ごみ集めのカレンダーも貼り変へたらしき月に入りゆく 日常つづく  
〈夢見草〉桜の異名と知りたるは週刊雑誌の小説の中  
たんぼぼの盛りの春よわづかなる土にも群れて黄に輝けり  
連翹の黄の花開けて枝すべてあはき緑の葉におほはれぬ

福士りか 青森

猫のゑさ姪の弁たう父のお茶そろへ出かけてゆく朝散歩  
たつぷりと甘酢に漬けたパプリカの日ごとろりと開けていく春  
お日さまのかんむり載せてひと休みしろつめくさを編む昼散歩  
水際の草たうたうとなびかせて水音こち良き水路  
丈高き萱をいつぽん引き抜いて猫のみやげとする夕散歩

藤野 早苗 福岡

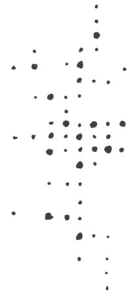
海風に薔薇のにはへるベイエリアみなとみらいの五月の朝  
公園といふ公園は花盛り幾万本の薔薇咲かしめて  
蕊近く潜みてゐたる花虻の飛跡踰たり春の午後  
咲くまへの薔摘まれて千金の佃のローズオイル一滴  
肥料喰ひの異名もちたる薔薇あまた咲かず横浜その底力

風間 博夫 千葉

やるせなし(苦渋の決断)値上げするときにとんかつ屋さん言ふのは  
決着をつけるの苦手あいまいの儘にしておく(まま)をよしとし  
ゴミ袋ゴミ回収車に投げ入れる作業者に言ふ「お疲れ様」と  
逆引きの機能搭載の電子辞書机において出来るわが歌  
足のほひ原因は「イソ吉草酸」<sup>キソウサザン</sup>悪臭防止法で規制す

田中 愛子 埼玉

うつかりと消去しさうで怖づ怖づと見をりスマホの母の写真を  
庭あらば庭掃きなどをやるものを…しゃしんの笑顔スマホに蔵ひ  
とりあへずシアワセーつてつばやけり何にもしない初夏のまひるま  
ガムテープをガムテと呼んで荷作りのプロフェッショナルになりたる気分  
この五月の空悲しからん 被害者のまた加害者のちはは、子どもら



水上 比呂美 東京

梅雨さなか生き物と生きてない物の境界線がぼんやりと在り  
雨の日は鯉呼吸して風の日は皮膚呼吸してわれに戻りぬ  
をさな児のもう一人のわれ生きてゐむ春の行潦かうらうの青ぞらの町  
石蹴りの上がりの柵さくにありにけり天国、きつね、おもらひ、地獄  
眠剤でゆやゆよーんと潜水し意識の奥の明るみへ行く

鈴木 竹志 愛知

人生のメリーゴーランドいつもいつも周章しゅうしょうてて乗つてあわてて降りる  
乗り遅れしない人生求めつつ結局いつも遅れてしまふ

「乗らないと、乗らないと。」といつも焦つてた少年時代そして今も  
乗り遅れたかもしれない 古希を過ぎ乗り遅れたつてそれだけのこと  
園内にまばゆき明かり放ちつつメリーゴーランドは回つてゐたよ

原 賀 瓊 子 東京

ああ無いな使へるものがなにも無いこのひと月のわれの歌メモ  
創造に適さぬわれのさがにして子のこく丙夜じつと手を見る  
線香の火がおちエプロンこがしたり鎧よろいを着てほんとによかつた  
「来日」と見出しをつける新聞ありゼレンスキー氏の広島入りに  
漆黒のからすの羽が落ちてをり羽いちまいのからすのかたち

水上 芙季 神奈川

十畳の部屋をくまなく見渡してどこ吹く風のサーキュレーター  
シュレッダーに過去の歌メモ吞ませればしばし雄叫びあげて黙りぬ  
パソコンに顔光らせて仕事する夫の向かひで本読む夕べ  
わが裡でボールダンスする人のゐて小さき夜のサーカスはじまる  
右斜め下へ下へと落ちゆけり夜と呼吸を合はせて下へ

大野 英子 福岡

いへぐもやもりもすでにゐなくなり実家を守るのはわれひとり  
こんなにも上天気なる日曜を風吹き荒れて見えぬつちふる  
あをあらしに揉みしだかれてあはれあはれ藪の新葉が落ち葉にまじる  
明朝は窓をすつぱり開け放たん鬱のたまつた空気放たん  
わが頭上をひくく羽ばたき超えてゆく鴉からすが零すけもの句ひ

鈴木 千登世 山口

リビングに娘と息子と夫がゐる頬のラインの似通ふ顔で  
子はスマホ夫は新聞見てをりぬ六年ぶりに揃ふといふに  
くれなるの新葉小さきゆづり葉の芽吹くに散りて散るに芽吹きて  
脱ぎ捨てて捨てたることを顧みぬ若さ確かにわれにありたり  
ゆづる気のないわが庭のゆづり葉を風神ノトスぽんと打ちゆく

小 島 なお\* 東京

ひとり280円で。抱いても身じろぎしない花束運ぶ  
撮るよつてすこし角度をつけながら背に遠すぎる戦火を飾り  
部屋干しの下着が揺れてなだらかな犬の背中せなかの運命の上  
舌で歯をたしかめて見る茜空揺らく揺らくと揺らがないもの  
血だらけの下腹内部を私より君が見ていくれた葉桜

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

青梅のひしひし実る暗緑の闇にこの世の容赦なき雨  
いとほしく思つたはうが負けならん雀ら来ない長雨の庭  
セーフティ・ネット破れてコロナ禍の雨、そして雨、コロナ後も雨  
兄さん猫とほく逝きたる夜を覚めてわが老い猫がほそく鳴きいづ  
病む猫の頭をのせて右腕はおもふかな薔薇一花のおもさ

鏝広の帽子かぶりて歩きたし体の芯がゆらぎある日は  
母病みて父も病みゐて見上げればただ空がある それだけでいい  
老いてゆくことを受け入れられぬまま父は泣きをり若葉も見ずに  
「すみません、お願いします」何回も言ひて過ぎゆく春の一日  
春いちご求めて帰る夕つ方 ころろに一ついちご灯して

詩歌句レッスン ● 小島ゆかり

〈部分と全体〉を考へる

《新聞転載》

今回は、歌を作るとき、また推敲するときに考へなければいけない、〈部分と全体〉ということについて具体的に見てみましょう。

台風の進路刻々伝うる夜なまりやさしき人を偲べり

心情のよくわかる、思いやりのある歌です。部分的には何の問題もない作品ですが、全体から一つの疑問が浮かびます。いったいどの地域の「なまり」なのか。たとえば沖繩と東北では、「なまり」のもたらす雰囲気がちがってきます。作者によれば、岩手県の方への思いとのこと。そこで、一言だけ入れ替えてみました。

台風の進路北へと伝うる夜なまりやさしき人を偲べり  
さて、第二段です。  
南風つよき日はわが庭に海が来るじゅわつとかいた汗に潮の香

（推敲例）

「南風」は夏の南風。スケールの大きな感覚が魅力的な歌です。しかしここでも、どんな海なのか気がなります。じつは作者は千葉県にお住まいの方。房総の海が近いので、潮の香りが庭にまで来るそうです。南風つよき日はわが庭に房総の海が近く汗に潮の香  
（推敲例）  
「じゅわつとかいた」という汗の描写よりも、「房総の海」の方が、全体を生かす

ことがわかんと思います。

さあ、第三段階。

ゆるやかな坂をのぼりてゆくときに風のなかなる実家のにほひ

なつかしい情感の漂ういい歌です。ところが、作者の年齢や状況によって情感の中心がちがってくることに気づきませんか。もっとも大事な部分は「実家のにほひ」ですが、独立して家を離れたばかりの人か、結婚してときどき実家にもどるときさか、それとも……じつは、作者は六十年代の方、もうご両親も他界され、実家は更地になってしまったそうです。ですから、記憶のなかの「実家のにほひ」がふと甦る、というわけです。  
ゆるやかな風のなかなり坂の道むかしの秋の実家のにほひ  
（推敲例）